論　文　ニダバ（*Nidaba*）50（2021），1-15

イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* における自動詞

― その派生と繋辞性 ―

上　野　貴　史

1. はじめに

ほぼ同じ属詞を後続させるイタリア語（*It.*）*sembrare* とフランス語（*Fr.*）*sembler* に関して、拙稿（2020b）では、後続させる属詞の頻度を数量的に調査することによりこれらの相違点を考察している。この中で、フランス語 *sembler* の自動詞用法では後続する属詞が Inf [1]と AP で 9 割を超えて出現するが、イタリア語 *sembrare* では Inf と AP に加えて DP での出現が多く見られるという指摘を行っている。そして、このイタリア語 *sembrare* が属詞としてフランス語 *sembler* より多くの DP を取ることに関して、フランス語 *sembler* にない「似ている」という意味（comparison）[2]をイタリア語 *sembrare* が有していることがその一因であることを指摘した。

（1）　...la sua voce non mi **sembra** <u>la mia</u>,...　（*MONITOR*[3]）

the his voice not me$_{Dat}$ seem$_{Pres.3Sg}$ the mine

「彼の声は私のと似ていない」

（1）においては、属詞として *la mia* という DP が出現し、動詞 *sembra* が「似ている」という意味を示している。このような comparison の意味が現代フランス語 *sembler* に見られないことがイタリア語 *sembrare* に後続する属詞として DP の出現割合を高めている可能性が考えられる。

さらに、拙稿（2020b）では、フランス語 *sembler* に後続する Inf がイタリア語 *sembrare* よりもかなり高い割合で出現するということについても触れている。

（2）　a. *Fr.*: Elle **semblait** <u>avoir</u> réussi.　（*Le Monde*[4]*: 1988*）

she seem$_{PastImp.3Sg}$ have$_{Inf}$ succeed$_{PastP}$

「彼女は成功したようであった」

b. *It.* : Quella voce **sembrava** <u>innalzarsi</u> dalla profondità degli spazi siderali.　（*NARRAT*）

that voice seem$_{PastImp.3Sg}$ raise$_{Inf}$ from.the depth of.the space sidereal

「あの声は星々がある宇宙空間の底から湧き上がってきたように思えた」

（2）における Inf を属詞として持つ構造は、動詞 *semblait/sembrava* が主語 *elle/quella voce* と述語 *avoir/innalzarsi* で構成される命題（proposition）全体を Theme の意味役割（θ-role）として有する。このように、Inf を属詞として持つ構造は、AP や DP などの属詞が小節述語として現れるものとは異なり、小節主語と Inf という命題全体で項を成すことから、繋辞的ではなく動詞的であり、この構造が多く出現するフランス語 *sembler* はイタリア語 *sembrare* よりも動詞性が高いということが指摘できる。

以上のような数量的分析から見えてくるフランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* との相違

点は、フランス語 *sembler* が動詞的(verbness)であるのに対して、イタリア語 *sembrare* が繋辞的(copulaness)であるということになる。このことは、フランス語 *sembler* が倒置構造を許さないのに対して、イタリア語 *sembrare* が許容するということにも現れる。

(3) a. *Fr.*: *Le mari de Suzy **semble** Pierre (Jones 1996: 71、一部改変)
the husband of Suzy seem$_{\text{Pres.3Sg}}$ Pierre

b. *It.* : il problema **sembravano** i pubblici ministeri (*STAMPA*)
the problem seem$_{\text{PastImp.3Pl}}$ the public prosecutors
「問題となるのは検察官であるようであった」

(3a)では小節主語 *Pierre* と小節述語 *le mari de Suzy* が倒置して出現しており、この場合、フランス語では非文法的になる。一方、(3b)のイタリア語では小節主語 *i pubblici ministeri* と小節述語 *il problema* の倒置が許容される。

本稿では、以上のようなイタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* に見られる属詞の分布や倒置文の生成における相違点が、両言語の属詞動詞が持つ性質の違いであるということに着目し、自動詞用法の基底構造を分析することにより、属詞構文の性質を明確にしていく。

2. 自動詞用法の基底構造と派生

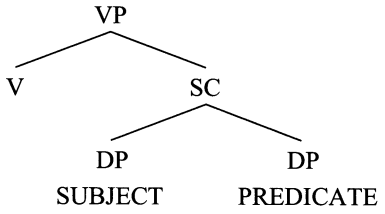
本節では、イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* における自動詞用法に関して、その基底構造が小節構造であるという前提のもと考察を加えていく。

2.1. イタリア語

2.1.1 小節構造

拙稿(2014, 2015)においては、*sembrare* の自動詞用法の基底構造を Moro(1997)で示されている(4)のような対称的小節構造(symmetric small clause)として分析している。

(4)



対称的小節構造においては、小節主語と小節述語が平坦に配置され、その小節(SC)と、V となるコピュラが併合するような構造となる。この構造で(5)の文の基底構造を示したものが(6)である。

(5) a. Il suo travestimento mi **sembra** adatto. (*NARRAT*)
the his disguise me$_{\text{Dat}}$ seem$_{\text{Pres.3Sg}}$ suitable
「私には彼の変装は似合っているように思う」

b. Quindi la filosofia mi **sembra** un esercizio molto interessane,... (*STAMPA*)
therefore the philosophy me$_{\text{Dat}}$ seem$_{\text{Pres.3Sg}}$ a exercise very interesting
「それ故、私には哲学が大変興味深い務めであるように思えるのだ」

(6) a. [$_{VP}$ mi **sembra** [$_{SC}$ [$_{Subj}$ il suo travestimento] [$_{Pred}$ adatto]]]

b. [$_{VP}$ mi **sembra** [$_{SC}$ [$_{Subj}$ la filosofia] [$_{Pred}$ un esercizio molto interessane]]]

(6)の基底構造から小節主語(Subj)位置にある要素が主節の主語位置に繰り上がることによって(5)のような規範文(canonical sentences)が派生する。同様に、イタリア語 *sembrare* においては、小節述語(Pred)が DP である場合、(7)のような基底構造から(8a)のような規範文に加えて(8b)のような倒置文(inverse sentences)も派生する。

(7) [$_{VP}$ **sembrare** [$_{SC}$ [$_{Subj}$ i pubblici ministeri] [$_{Pred}$ il problema]]]

(8) a. i pubblici ministeri **sembravano** il problema

b. il problema **sembravano** i pubblici ministeri [=3b]

(8b)のように小節述語 *il problema* が主節主語位置に出現する倒置文は、コピュラである *essere* と同様、イタリア語では *sembrare* においても文法的となるが、英語 *seem* やフランス語 *sembler* においては(9)で示すように非文法的となる。

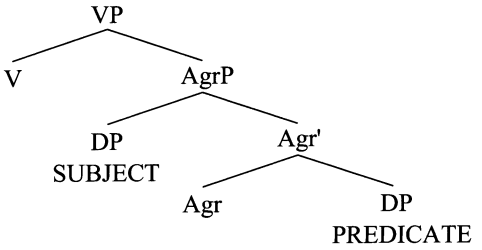
(9) a. *Eng.*: The best candidate seems *(to be) John. (den Dikken 1994: 4)

b. *Fr.* : *Le mari de Suzy {devient/reste/semble/paraît} Pierre (Jones 1996: 71)

英語とフランス語では *seem/sembler* に *be/être* というコピュラが後続する場合には、同定文(identificational sentence)の読みとして文法的になるが[5]、イタリア語 *sembrare* のような名詞述語倒置文は容認されない。このことは、イタリア語 *sembrare* と、英語 *seem*・フランス語 *sembler* が異なる構造を有していることを提示していると思われるが、(4)で示した対称的小節構造ではこのことを説明することは困難である。

そこで、拙稿(2020a)では、Bowers(1993)や den Dikken(1994)などで提案されている X バー理論に基づく非対称的小節構造を用いて名詞述語文の分析を行った。その小節構造は、概ね(10)のように示すことができる。

(10)



(10)で示した AgrP の主要部である Agr は、小節述語 DP に格(case)を付与する機能範疇であると考えられる。例えば、ポーランド語の動詞的コピュラ文(verbal copula clauses)におけるコピュラ *być* "be"は、小節述語 DP に具格を付与するため AgrP の主要部に出現するものと考えられる(Citko: 2008)。イタリア語においては、小節述語 DP に格付与をすることはないが[6]、(11)のように、小節主語 DP と小節述語との φ 素性(φ feature)の一致(女性・複数)が見られることから、AgrP の主要部には音形のない欠格(defective)機能範疇があると見なすことが可能である。

(11) Le sue scuse, però, **sembravano** sincere. (*MONITOR*)

the her$_{Gen}$ excuse$_{Fem.Pl}$ however seem$_{PastImp.3Pl}$ sincere$_{Fem.Pl}$

「しかしながら、彼女の弁解は誠実であったようだ」

以上のことから、本稿では(12)のような非対称的な小節構造をイタリア語の基底構造として設定する。

(12) $[_{VP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ DP$]$ $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]$

2.1.2 小節構造からの派生

次に、このような非対称的小節構造で、イタリア語 *sembrare* が倒置文を許容する問題について考えてみる。den Dikken (1994) では、(9a) のような英語 *seem* の倒置文が容認されないのは、小節述語が主節主語位置に移動する際に、小節主語位置にある小節主語と交差(cross)するためであるとしている[7)]。

(13) $[_{VP}$ Spec **seem** $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ DP$]$ $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP$]]]]$ (den Dikken 1994: 4、一部改変)

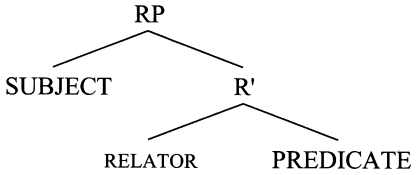
(13)の *seem* の基底構造において、小節述語 DP が主節主語位置である VP 指定部に移動するためには、小節主語指定部の小節主語 DP と交差することになり、den Dikken (1994) にはこれが倒置文の派生を妨げている要因であるとの指摘が見られる。一方、*be* の倒置コピュラ文は、コピュラが Agr を編入(incorporate)し、VP 指定部と AgrP 指定部が等距離(equidistant)になることで、小節述語の移動が可能となり容認される。

(14) $[_{VP}$ DP$_i$ **be** + Agr$_j$ $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ DP$]$ $[_{Agr}$ t$_j$ $[_{Pred}$ t$_i]]]$ (Heycock 1995: 229、一部改変)

(14)は、Agr 主要部がコピュラ *be* に編入されることにより小節述語が VP 指定部へ移動することが可能となることを示している[8)]。

さらに、den Dikken (2006) では den Dikken (1994) を発展させて、「時制(tense)がない RP」を小節とし、小節の機能主要部が RELATOR となる(15)のような構造を提示している。

(15)



(den Dikken 2006: 3)

そして、倒置文は(16)のよう派生する。

(16) $[_{TP}$ $[_{Pred}$ DP$_i$ $[_{T'}$ **be** (T + RELATOR$_j$) $[_{RP}$ $[_{Subj}$ DP$]$ $[_{R'}$ t$_j$ $[_{Pred}$ t$_i]]]]]$

(16)は、RP 主要部である RELATOR が TP 主要部に繰り上がることを示している。この繰り上げにより小節主語と小節述語が等距離となり、小節述語が TP 指定部へ繰り上がる倒置文の派生を許すことになる。このような RELATOR の繰り上げは、一つの位相(phase)を形成する RP の位相拡張を伴う。この結果として、小節主語は RP 位相内に埋め込まれ、外部の探索子(probe)といかなる一致関係も確立されない。このため、den Dikken (2006) では、英語 *be* は倒置述語の素性と一致し((17a))、小節主語はデフォルト(default)である対格として出現するとしている((17b))。

(17) a. The biggest problem <u>is/*are</u> the children.

b. The best candidate is <u>me/her/him</u>. (den Dikken 2006: 117)

以上のような den Dikken (2006) によって示された Agr 主要部の VP への繰り上げによる解決法は、英語における *be* の一致や格付与の説明に対しては有効であるが、イタリア語の倒置文

には適用できない部分が見られる。例えば、イタリア語のコピュラ *essere* の倒置文は、(18)のように *essere* が取り残された小節主語と一致する。

(18) la causa della rivolta **sono** <u>le foto del muro</u> (Moro 1997: 60)
the cause$_{Sg}$ of.the riot be$_{Pres.3Pl}$ the pictures$_{Pl}$ of.the wall
「暴動の原因は壁の絵である」

(18)では、コピュラ *sono*（三人称複数）は RP 内に取り残された小節主語 *le foto del muro*（三人称複数）と一致している。このことは、RP 内に取り残された小節主語が外部の探索子と一致関係が起こらないとする den Dikken(2006)の主張と矛盾するものとなる。

このような倒置文の派生に対し、Shlonsky & Rizzi(2018)では、(19)で示すように、まず小節主語が Belletti(2004)で指摘されている低い VP 節内焦点位置(low focus)へ移動するとしている。

(19) Subj [$_{VP}$ *essere* [$_{FocP}$ DP$_i$ [$_{AgrP}$ t$_i$ [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ DP]]]]]

この後、AgrP はこの FocP を越えて smuggling 移動[9]する（(20)）。

(20) Subj [$_{VP}$ *essere* [$_{AgrP}$ t$_i$ [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ DP]]$_j$ [$_{FocP}$ DP$_i$ t$_j$]]

この smuggling 移動により、主節主語節(SUBJ)と小節述語が c 統御(c-command)することになり、小節述語 DP が主節主語節の指定部へ繰り上がることになるのであるが、この主語位置に関して Rizzi(2015)では(21)のような二つの主語位置を提示している。

(21) ... Fin ... Subj$_2$ ... Subj$_1$ ... Phi ... T ... (Rizzi 2015: 30)

この複合主語主要部 Subj$_2$ + Subj$_1$ における Subj$_1$ は、aboutness 関係[10]を示す義務的成分であるのに対して、Subj$_2$ は断定的(categorical)判断を表現する場合にだけ選択されるものであるとされる。イタリア語の倒置文の場合、(22)のように、smuggling された AgrP から小節述語 DP が抽出され Subj$_2$ の指定部へ移動することになる。

(22) [$_{Subj2}$ DP$_k$ Subj$_2$ [$_{Subj1}$ Subj$_1$ [$_{VP}$ *essere* [$_{AgrP}$ t$_i$ Agr t$_k$]$_j$ [$_{FocP}$ DP$_i$ t$_j$]]]]

このような主語位置に複数の場所が存在するという指摘は Cardinaletti(2004)にも見られる。Cardinaletti(2004)では、空主語言語(null subject language)・非空主語言語(non-null subject language)というパラミター(parameter)に関係なく、普遍的に文には文法的主語 AgrSP と意味的主語 SubjP があるとしている。「弱い主語」が占める AgrSP は φ 素性が名詞句と照合される投射が行われるのに対して、「強い主語」が生じる SubjP は叙述主語素性("subject-of-predication" feature)が照合される投射が行われる。その構造は(23)のように要約される。

(23) [$_{SubjP}$ [$_{AgrSP*}$ [$_{TP}$ ... [... [$_{VP}$ ...]]]]] (Cardinaletti 2004: 120)

Shlonsky & Rizzi(2018)の Subj$_2$ と同様、(23)の構造においても、倒置文の主語はより高い主語である SubjP の指定部に出現する。この Cardinaletti(2004)における構造で(22)を書き換えたものが(24)となる。

(24) [$_{SubjP}$ DP$_k$ [$_{AgrSP}$ ... [$_{VP}$ *essere* [$_{AgrP}$ t$_i$ Agr t$_k$]$_j$ [$_{FocP}$ DP$_i$ t$_j$]]]]

このような構造において、動詞との一致を示すのは AgrSP であるため、イタリア語の場合、SubjSP にある小節述語との一致は回避される[11]。

ここで問題となるのは、イタリア語倒置文において、動詞との一致を示す AgrSP にどのような要素があるのかということである。このことに関して、Moro(1997)では空述語(null predicate)

pro が動詞後置主語の素性を共有し、動詞における一致を起こしていると説明しているが、Cardinaletti (2004) ではドイツ語で空述語の存在が否定されることから、倒置文における動詞前位置は空述語ではなく虚辞 pro_{expl} で埋められているとしている。例えば、(8b) の倒置文は、(25) の基底構造から (26) のような派生が行われることになる。

(25) $[_{VP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ i pubblici ministeri$]$ $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ il problema$]]]]$

(26) $[_{SubjP}$ il problema$_k$ $[_{AgrSP}$ pro_{expl} $[_{TP}$ **sembravano** $[_{AgrP}$ t_i Agr $t_k]_j$ $[_{FocP}$ i pubblici ministeri$_i$ $t_j]]]]$

(26) は小節主語 *i pubblici ministeri* が節内 FocP に移動した後、AgrSP が smuggling で小節主語の前に移動し、小節述語 *il problema* が SubjP 指定部へ繰り上がると共に AgrSP に pro_{expl} を生じることによって動詞との一致が行われることを示している。

このような smuggling 移動を可能とするためには、小節主語 DP が Shlonsky & Rizzi (2018) の言う基準凍結 (criterial freezing) になっていないということが必要となる [12]。基準凍結は、句移動の停止点であり、Cardinaletti (2004) における AgrSP がそれに相当し、主語 DP がこの位置に到達している場合、それ以上の移動は不可能となる。本節で扱ったイタリア語 *sembrare* は、コピュラと同様、倒置文の派生を可能としている。このことは、*sembrare* に後続する構造が小節構造を有しているという証拠になり、AgrSP に pro_{expl} が生じるまで主語 DP は移動することが可能となることを意味する [13]。

一方、(8a) の規範文の場合は、倒置文と同じ (25) の基底構造から (27) のように派生すると考えられる。

(27) $[_{SubjP}$ i pubblici ministeri$_i$ $[_{AgrSP}$ t_i $[_{TP}$ **sembravano** $[_{AgrP}$ t_i $[_{Agr}$ Agr $[_{Pred}$ il problema$]]]]]]$

(27) は、小節主語である *i pubblici ministeri* が AgrSP に繰り上がることによって動詞 *sembravano* と一致し、さらにこれが強い DP であるので SubjP まで繰り上がることを示している。

このような小節主語に明示的 DP が出現するもの以外に、イタリア語には (28) のような小節の主語が音形として現れない文が存在する。

(28) ..., e ci **sembrò** una cosa ingiusta. (*NARRAT*)
and us$_{Dat}$ sembrare$_{PastRem.3Sg}$ a thing unjust
「私たちにはそれは正しくないことのように思えた」

(28) は、小節主語に *pro* が出現する (29) のような基底構造から (30) のように派生すると考えられる。

(29) $[_{VP}$ ci **sembrò** $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ *pro*$]$ $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ una cosa ingiusta$]]]]$

(30) $[_{SubjP}$ $[_{AgrSP}$ pro_i $[_{TP}$ ci **sembrò** $[_{AgrP}$ t_i $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ una cosa ingiusta$]]]]]]$

(30) は、小節主語である *pro* が AgrSP に生じ、動詞と φ 素性の一致を行っていることを示している。

以上のことから、イタリア語 *sembrare* の自動詞用法に関する基底構造を (31) のようにまとめて示すことができる。

(31) $[_{VP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ DP/*pro*$]$ $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]$

(31) の基底構造から、それぞれの属詞を持つ文は (32) のように派生すると考えられる。

(32) a. 規範文

i) $[_{SubjP}$ DP$_i$ $[_{AgrSP}$ t$_i$ $[_{TP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ t$_i$ $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]]]$

ii) $[_{SubjP}$ $[_{AgrSP}$ *pro*$_i$ $[_{TP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ t$_i$ $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]]]$

b. 倒置文

$[_{SubjP}$ DP$_k$ $[_{AgrSP}$ *pro*$_{expl}$ $[_{TP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ t$_i$ Agr t$_k]_j$ $[_{FocP}$ DP$_i$ t$_j]]]]$

規範文は、小節の主語が強い DP である場合、(32a-i)のように小節主語が AgrsP を経由して SubjP に繰り上がるのに対して、小節主語が *pro* である場合は、(32a-ii)のように *pro* が AgrSP に生じる。一方、倒置文は、小節述語が DP の場合に限定されるが、小節主語が節内 FocP へ移動し、AgrP がその前に smuggling 移動する。そして、その AgrP から小節述語が抽出され SubjP 指定部へ繰り上がると共に AgrSP に *pro*$_{expl}$ が生じることになる。

2.2. フランス語

2.2.1 規範文の派生

Jones(1996)は、フランス語コピュラ *être* と同様、*sembler* をコピュラの一つとして取り上げており[14]、その構造を(33)のような小節構造として分析している。

(33) SC → NP + XP (where XP = NP, AP or PP) (Jones 1996: 70)

(33)で示した Jones(1996)の小節は対称的構造で示されているが、他の範疇を加えてこれを本稿で使用している X バーの構造で示すと(34)のようになり、イタリア語と同じような基底構造として示すことができる。

(34) $[_{VP}$ **sembler** $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ DP$][_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]$

このような基底構造からイタリア語と同様に、Cardinaletti(2004)の動詞前主語フィールドの枠組みで(35)の文の派生を簡略的に示すと(36)のようになる。

(35) M. Bolloré **semble** le plus isolé. (*Le Monde: 1988*)

M. Bolloré seem$_{Pres.3Sg}$ the most isolated

「ボロレ氏が最も孤立しているようである」

(36) $[_{SubjP}$ M. Bolloré$_i$ $[_{AgrSP}$ t$_i$ $[_{TP}$ **semble** $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ t$_i][_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ le plus isolé$]]]]]]$

フランス語では、(36)で示したように、小節主語 *M. Bolloré* が AgrSP に移動して φ 素性を照合し、さらに SubjP に繰り上がる。このように小節主語に固有名詞や DP のような「強い主語」(strong subjects)が現れるものの派生は(36)のようになると考えられるが、小節の主語に代名詞が出現する(37)のような文は(34)のような基底構造から派生しているとは言い難い。

(37) Elle **semblait** triste et pensive,... (*Corpatext*)

she sembler$_{PastImp.3Sg}$ sad and pensive

「彼女は悲しげで愁いに沈んでいるように見えた」

それは、(37)の主語代名詞 *elle* が接語代名詞(clitic pronouns)[15]であり、接語代名詞は「強い主語」とは異なる特有の性質を示すためである。

接語代名詞に関して、Jones(1996: 249)は(38)のような特性を提示している。

(38) Clitic pronouns:

I. *Clitic pronouns are always attached to the verb (preceding the verb, except in positive imperative sentences ...).*

II. *Clitic pronouns cannot be separated from the verb except by another clitic.*

III. *Clitic pronouns occur in a fixed order (...).*

IV. *The grammatical function of clitic pronouns (subject, direct object, etc.) is indicated by their form, not by their position (i.e. clitics inflect for Case).*

V. *Clitic pronouns cannot be conjoined.*

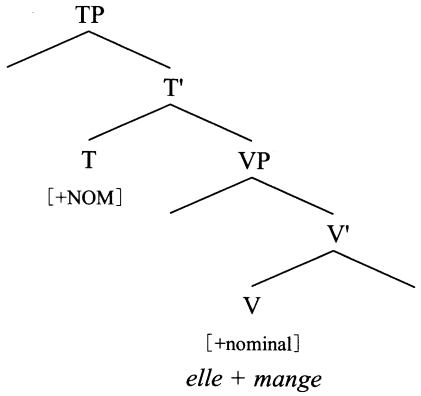
例えば、(39a)は挿入句 *je crois* が接語代名詞 *il* と動詞 *est* を分離させていることから非文となり、(39b)は *il* と *elle* という接語代名詞が等位接続されているため非文となる。

(39) a. *Il, *je crois*, est déjà arrivé
he I think be$_{Pres.3Sg}$ already arrive$_{PastP}$

b. *Il *et elle* sont arrivés (Jones 1996: 250)
he and she be$_{Pres.3Pl}$ arrive$_{PastP}$

Safir(1985)によると、このような接語代名詞は動詞の上に[+nominal]素性として生成し、T から主格を直接付与されるとされる。これに従って、*elle mange* という文の構造を本稿では(40)のように示す。

(40)



(40)は、V に基底生成する接語代名詞[+nominal]が T から主格を付与されて *elle* という形態を持つことを示している[16]。そして、この場合、VP の指定部には(41)のようなイタリア語の主語位置に生じるものと同じような代名詞的空範疇 *pro* が生起していると考えられる[17]。

(41) *pro* **sembra** che Maria è malata
pro seem$_{Pres.3Sg}$ that Mary be$_{Pres.3Sg}$ sick
「マリアは病気のようだ」

(41)は動詞 *sembrare* に定形節が後続する文であるが、この構造における主語位置には代名詞的空範疇 *pro* が生じる(拙稿 2020a)。このイタリア語と全く同じ構造は、口語フランス語にも見られる。

(42) *pro* **semble** que Marie est malade (Rizzi 1994: 168、一部改変)

口語フランス語においては、(42)のように、接語主語代名詞 *il* が脱落することがある。口語フ

ランス語における接語主語代名詞が出現しない(42)のような文は、接語主語代名詞を持たないイタリア語と全く同じ並びとなることから、口語フランス語の VP 指定部にもイタリア語と同じ様な *pro* が生じることが想定される。また、接語主語代名詞 *il* の出現が義務的である標準フランス語においても、接語主語代名詞 *il* が動詞の上に生成されるとすると、(43)のように、VP 指定部には *pro* が生起すると考えることができる。

(43) [$_{VP}$ *pro* [$_{V}$ il **semble**]] que Marie est malade

このことを本稿での小節構造分析に適用してみると、接語主語代名詞が出現する基底構造は(44)のように示すことができる。

(44) [$_{VP}$ [+nominal] **sembler** [$_{AgrP}$ [$_{Subj}$ *pro*] [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP]]]]

この基底構造から、(37)の文は(45)のように派生する。

(45) [$_{SubjP}$ [$_{AgrSP}$ *pro*$_{i}$ [$_{TP}$ elle **semblait** [$_{AgrP}$ t$_{i}$ [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ triste et pensive]]]]]]

(45)は、V に基底生成する接語代名詞[+nominal]が T から主格を付与されて *elle* となり、この動詞複合が TP に繰り上がると共に、小節の主語 *pro* が AgrSP に生じることを示している。

さらに、このような接語主語代名詞の出現のさらなる考察のために、(46)のような疑問文を取り上げてみる。

(46) ..., l'homme ne te **semble**-t-il pas une effroyable créature? (*Corpatext*)
the-man *ne* you$_{Dat}$ seem$_{Pres.3Sg}$-*t*-he *pas* a dreadful creature
「君は人間というのは恐ろしい生き物だと思わないか？」

疑問文の場合、(46)のように、DP 主語である *l'homme* に加えて接語主語代名詞 *il* が倒置して出現する。このような疑問文に見られる接語主語倒置に関して、Jones(1996)では、理論的に問題があるとしながらも、動詞と主語が CP に移動するという説明を行っている。例えば、(47)のような文は、(48)のような構造から、*wh* 要素である *comment* が CP の指定部、定動詞 *est* が I を経由して C へ繰り上がる((49))。

(47) Comment cela est-il possible? (Jones 1996: 483)
how that be$_{Pres.3Sg}$-it possible
「どうしてあんなことができるのですか？」

(48) [$_{CP}$ Spec C [$_{IP}$ cela I [$_{VP}$ être possible comment]]]

(49) [$_{CP}$ comment est [$_{IP}$ cela I [$_{VP}$ ____ possible ____]]]

そして、主語 *cela* が CP 付加部のような *comment* と動詞の間にある位置に移動し、接語主語代名詞 *il* を残すとしている((50))。

(50) [$_{CP}$ comment [$_{C'}$ cela [$_{C'}$ est [$_{IP}$ il [$_{VP}$ ____ possible ____]]]]]

Jones(1996)が提示しているこのような CP 付加部への移動は、一種の左方転移(left dislocation)と考えられるが、Cardinaletti(2004)では、このような左方転移を動機づけるものがないとし、主語は CP 領域ではなく IP 領域に属するものであるという主張を行っている。Cardinaletti(2004)では、2.1.2 節で触れたように、「強い主語」が SubjP 指定部を占め、接語主語代名詞が SubjP 主要部に隣接し、さらに動詞がそれに隣接するような派生を主張している。この枠組みで(47)の派生を示すと(51)のようになる。

(51) [$_{CP}$ comment [$_{SubjP}$ cela$_i$ [$_{SubjP'}$ est$_j$-il$_k$ [$_{AgrSP}$ t$_i$ [$_{TP}$ t$_k$ t$_j$ [$_{AgrP}$ t$_i$ Agr possible]]]]]]

(51)は小節主語である *cela* が SubjP の指定部へ繰り上がり、疑問文であるため義務的に出現する接語主語代名詞 *il* と動詞 *est* が SubjP 主要部に隣接する結果、倒置が起こることを示している。このように、Cardinaletti(2004)の分離主語の考え方を採用することにより、接語主語代名詞の出現を適切に説明することが可能となる。

以上のことから、フランス語 *sembler* の自動詞用法の基底構造を(52)のように示すことにする。

(52) [$_{VP}$ [+nominal] **sembler** [$_{AgrP}$ [$_{Subj}$ DP/*pro*] [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP]]]]

(52)の基底構造から、小節主語が「強い主語」の場合は(53i)、接語主語代名詞のような「弱い主語」が出現する場合は(53ii)のような派生が行われることになる。

(53) i) [$_{SubjP}$ DP$_i$ [$_{AgrSP}$ t$_i$ [$_{TP}$ **sembler** [$_{AgrP}$ t$_i$ [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP]]]]]]

ii) [$_{SubjP}$ [$_{AgrSP}$ *pro*$_i$ [$_{TP}$ [+nominal] **sembler** [$_{AgrP}$ t$_i$ [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP]]]]]]

フランス語 *sembler* における倒置文に関しては、"*With copular verbs other than être, only the subject of the small clause can be raised to the subject position in the main clause.*" (Jones 1996: 72)という制約があり、このため(54)のような *être* 以外のコピュラ動詞の倒置文が容認されない。

(54) *Le mari de Suzy {devient/reste/semble/paraît} Pierre (Jones 1996: 71)

また、フランス語ではコピュラ *être* であっても、倒置文においては(55c)のように代名詞 *ce* の出現が義務的となる。

(55) a. Gertrude est la meilleure cuisinière.
Gertrude be$_{Pres.3Sg}$ the best cook
「ガートルードは最高の料理人だ」

b. *La meilleure cuisinière est Gertrude. (Amary 2019: 8)

c. La meilleure cuisinière, *c'*est Gertrude. (Amary 2019: 9)

このようなフランス語における倒置コピュラ文に関して、代名詞 *ce* の出現に着目して次節で考察を進めていいく。

2.2.2 コピュラ文における*ce*

Roy & Shlonsky(2019)では、倒置文だけでなく、規範コピュラ文においても代名詞 *ce* が出現する場合があることに言及している。

(56) Jean *c'*est mon meilleur ami. (Roy & Shlonsky 2019: 155)
Jean *ce*-be$_{Pres.3Sg}$ my best friend
「ジャンは私の親友だ」

(56)では、情報構造的に *ce* + *être* の前の *Jean* が前提(presupposition)となり、後の *mon meilleur ami* が焦点(focus)となる。このようなコピュラ後置 DP が焦点となる構造は、(58)の基底構造にある小節述語が節内 FocP の指定部へ移動することから生じる。

(57) [$_{VP}$ être [$_{AgrP}$ [$_{Subj}$ Jean] [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ mon meilleur ami]]]]

(58) [$_{VP}$ être [$_{FocP}$ mon meilleur ami$_k$ [$_{AgrP}$ [$_{Subj}$ Jean] [$_{Agr'}$ Agr t$_k$]]]]

そして、次に値未付与 φ 素性を持つ主節主語を併合するわけであるが、フランス語の一致は、純粋な素性照合に加えて、一致目標子が探索子の指定部へ移動する必要がある(Roy & Shlonsky 2019: 157)。このとき φ 素性との照合を行うために代名詞 *ce* が外的併合をする((59))。

(59) *ce* SUBJ [$_{TP}$ être [$_{FocP}$ mon meilleur ami$_k$ [$_{AgrP}$ [$_{Subj}$ Jean] [$_{Agr'}$ Agr t$_k$]]]]]

Roy & Shlonsky(2019)によると、この場合の FocP 指定部にある小節述語 DP は規準凍結(critical freezing)しており、AgrSP 指定部に移動することができないため、虚辞 *ce* の外的併合が行われるとしている。つまり、*ce* の出現は小節要素が AgrSP 指定部に移動できない場合に出現するということになる。この後、AgrP が *ce* の上に smuggling 移動し、AgrP 指定部にある *Jean* が SubjP 指定部へ繰り上がる((60))。

(60) [$_{SubjP}$ Jean$_i$ [$_{AgrP}$ t$_i$ Agr t$_k$]$_j$ [$_{AgrSP}$ ce [$_{TP}$ être [$_{FocP}$ mon meilleur ami$_k$ t$_j$]]]]

このように、規範コピュラ文における *ce* の出現は小節述語の焦点化に起因するものであるが、倒置コピュラ文においては小節主語が必ず焦点化するため *ce* の出現が義務的になる。例えば、(61)の倒置コピュラ文は、規範コピュラ文と同じ(57)の基底構造から、節内 FocP の指定部へ小節主語が移動することで焦点化する((62))。

(61) Mon meilleur ami *c'*est Jean. (Roy & Shlonsky 2019: 161)

(62) [$_{VP}$ être [$_{FocP}$ Jean$_i$ [$_{AgrP}$ t$_i$ [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ mon meilleur ami]]]]]

次に、AgrSP が併合し、規範コピュラ文と同じ理由で *ce* が外部併合される。そして、AgrP が AgrSP の上に smuggling 移動し、SubjP が併合され AgrSP 内の *mon meilleur ami* が指定部へ移動する((63))。

(63) [$_{SubjP}$ mon meilleur ami$_k$ [$_{AgrP}$ t$_i$ Agr t$_k$]$_j$ [$_{AgrSP}$ ce [$_{TP}$ être [$_{FocP}$ Jean$_i$ t$_j$]]]]

以上のコピュラ文における構造の考察から、倒置文は節内 FocP への小節要素の移動が可能となる場合に派生されるということが分かる。このことから、(54)のような *sembler* の倒置文が容認されないので、*sembler* の小節には節内 FocP という位置が存在しないということが想定できる。このような節内 FocP は、フランス語の場合コピュラ *être* が小節と併合する場合にのみ生じるもので、属詞動詞 *sembler* の併合では生じないものと思われる[18]。

しかしながら、*sembler* にコピュラ *être* が後続する(64)のような文は文法的である。

(64) Le mari de Suzy **semble** <u>être</u> Pierre (Jones 1996: 71、一部改変)

このような文は同定文として容認されるが、これが文法的となるのは、主動詞 *sembler* が *être* による小節構造を後続することによって構成されていることがその理由であると考えられる。このことを(64)の派生から検証してみる。

(65) a. [$_{AgrP}$ [$_{Subj}$ Pierre] [$_{Agr'}$ Agr [$_{Pred}$ le mari de Suzy]]]

b. [$_{VP}$ être [$_{FocP}$ Pierre$_i$ [$_{AgrP}$ t$_i$ Agr [$_{Pred}$ le mari de Suzy]]]]

c. [$_{SubjP}$ le mari de Suzy$_k$ [$_{AgrSP}$ t$_k$ [$_{TP}$ **sembler** [$_{AgrP}$ t$_i$ Agr t$_k$]$_j$ [$_{VP}$ être [$_{FocP}$ Perre$_i$ t$_j$]]]]]

まず、小節主語 *Pierre* と小節述語 *le mari de Suzy* による小節が併合される((65a))。これにコピュラ *être* が併合することにより、節内 FocP が生じ、小節述語 *le mari de Suzy* がその指定部へ移動する((65b))。そして、この小節構造にさらに主動詞 *sembler* とその主語 SUBJ が併合し、smuggling 移動した AgrP の *le mari de Suzy* が抽出され AgrSP 指定部で一致が行われた後、SubjP

指定部へと繰り上がる（(65c)）[19]。このようなことから、*sembler* にコピュラ *être* が後続する構造において、これを倒置構造として容認しているのは、節内 FocP を有する *être* に因るということが理解される。

以上のように、節内 FocP を持つかどうかという点がイタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* における大きな相違点となり、この意味において、イタリア語 *sembrare* は繋辞的であり、フランス語 *sembler* は非繋辞的であるということが指摘できると思われる。

3. 結語

本稿では、イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* における自動詞用法に関して、基底構造とその派生という点からこれらの相違点を考察した。まず、両言語における基底構造は、(66)のように示すことができる。

(66) a. *It.* : $[_{VP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ DP/*pro*$]$ $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]$

b. *Fr.*: $[_{VP}$ [+nominal] **sembler** $[_{AgrP}$ $[_{Subj}$ DP/*pro*$]$ $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]$

イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* の基底構造は、小節主語として DP/*pro*、そして同じ範疇の属詞を小節述語として持つ小節構造から構成されている。基底構造における両言語における唯一の相違点は、フランス語がイタリア語にはない接語主語代名詞を持つということになる。このような基底構造から両言語は、(67)と(68)で示すような派生が行われる。

(67) イタリア語

a. 規範文

i) $[_{SubjP}$ DP_i $[_{AgrSP}$ t_i $[_{TP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ t_i $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]]]$

ii) $[_{SubjP}$ $[_{AgrSP}$ pro_i $[_{TP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ t_i $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]]]$

b. 倒置文

$[_{SubjP}$ DP_k $[_{AgrSP}$ pro_{expl} $[_{TP}$ **sembrare** $[_{AgrP}$ t_i Agr $t_k]_j$ $[_{FocP}$ DP_i $t_j]]]]$

(68) フランス語

a. 規範文

i) $[_{SubjP}$ DP_i $[_{AgrSP}$ t_i $[_{TP}$ **sembler** $[_{AgrP}$ t_i $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]]]$

ii) $[_{SubjP}$ $[_{AgrSP}$ pro_i $[_{TP}$ [+nominal] **sembler** $[_{AgrP}$ t_i $[_{Agr'}$ Agr $[_{Pred}$ DP/Inf/AP/PP/AdvP$]]]]]]$

両言語における規範文は、小節主語が DP の場合、AgrSP を経由して SubjP に繰り上がり、小節主語が *pro* の場合、AgrSP に繰り上がる。ただし、フランス語における小節主語が *pro* の場合は、接語主語代名詞が出現するという点でイタリア語とは異なる。倒置文に関しては、イタリア語が倒置構造を許容するのに対して、フランス語が容認しないという大きな違いが見られる。これは、構造的にはイタリア語 *sembrare* がコピュラと同様、節内に FocP を持つことができるのに対して、フランス語 *sembler* が FocP を容認しないという動詞の持つ構造の違いに起因する。このような節内 FocP は、コピュラが有する構造上の特徴であり、この意味においてイタリア語 *sembrare* は繋辞性が強い動詞であるという指摘が可能であると思われる。

イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* に関する数量的分析を行った拙稿(2020b)においては、イタリア語 *sembrare* の繋辞性(copulaness)とフランス語 *sembler* の動詞性(verbness)について

の指摘を行った。本稿では、統語的派生という観点から、イタリア語 *sembrare* とフランス語 *sembler* における分析を行ったが、節内 FocP の有無というような点において両言語における繋辞性と動詞性という相違点が指摘できたと思われる。今後は、古フランス語に見られた *sembler* の comparison という意味が現代語において消失しているということに着目し、本稿で扱った繋辞性・動詞性という観点を通時的に考察していきたいと考えている。

* 本稿は、2020 年 9 月 5 日、広島大学文学部で開催された第 50 回西日本言語学会おいて「フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* における属詞構文」と題して口頭発表を行ったものに加筆・修正を施したものである。

<註>

1) 本稿で使用する略号は次の通り。A：形容詞、P：前置詞、Adv：副詞、D：決定詞、3：三人称、女性：Fem、Sg：単数、Pl：複数、Dat：与格、Gen：属格、Pres：現在形、PastImp：半過去形、PastRem：遠過去、、Inf：不定詞、PastP：過去分詞、EXP：虚辞代名詞。

2) Rooryck (1997) には、*sembrare/sembler* などの繰り上げ動詞の主要な意味素性は comparison「比較・類似」であり、多くの言語で comparison を表す動詞と繰り上げ動詞の語幹が等しいという指摘が見られる。

3) イタリア語に関しては、*CORIS Corpus* からデータの収集を行っている。*CORIS Corpus* におけるサブカテゴリーは次の通り。*NARRAT*：小説・物語、*STAMPA*：新聞・雑誌、*MONITOR*：モニターコーパス。

4) フランス語に関しては、*Lextutor French Corpus* における書き言葉である"Le Monde", "Ecrit", "Corpatext" のサブコーパスからからデータの収集を行っている。

5) フランス語でも *Le mari de Suzy semble être Pierre.* のように、*sembler* にコピュラ *être* が後続すると文法的になる。

6) イタリア語のコピュラ文において、小節述語 DP を接語化する場合、ii) のような非屈折接語 *lo* は可能であるが、i) のような対格屈折接語は非文法的となる。

i) *le foto del muro *la* sono

ii) le foto del muro *lo* sono (Moro 1997: 71)

このことは、Agr が格を付与する能力を持たないことを示している証左となる。

7) この他、Shlonsky & Rizzi (2018: 41) は、相対最小性 (Relativized Minimality) の立場から、c 統御している主語を越えての小節述語名詞の移動が非文法的な A 連鎖 (A-chain) を生じていることにより英語などで倒置文が容認されないということを指摘している。

8) Heycock (1995) では、倒置文を可能とする動詞は、小節の前にさらなる内部構造を持つという考察を行っている。

9) Collins (2005: 97) では、smuggling は"Suppose a constituent YP contains XP. Furthermore suppose that XP is inaccessible to Z because of the presence of W..., which blocks a syntactic relation between Z and XP.... If YP moves to a position c-commanding W, we say that YP smuggles XP past W."と定義されている。

10) Rizzi (2015: 24) には、"the subject is the argument that is taken as the starting point in the description of the event, which is presented as "being about" that argument"という記述が見られる。

11) 英語倒置コピュラ文の場合は、小節述語 DP が一旦 AgrSP 指定部に移動して動詞との一致を行った後、さらに SubjSP へ移動するものと考えられる。

12) 英語 *seem* は倒置文を許さないことから、派生の早い段階で AgrSP に小節主語が繰り上がり、基準凍結が行われていると考えられる。

13) Cardinaletti (2004) には、一致は「書き出し後の照合」(checking after Spell-Out) または「長距離一致」(long-distance agreement) を通して行われるという指摘がある。

14) Jones (1996) では、*sembler* 以外にも *devenir, rester, paraître* も小節構造を持つとしている。

15) フランス語の代名詞は、*je/tu* などのような接語代名詞と、*moi/toi* のような離接代名詞 (disjunctive pronouns) に大別される。離接代名詞は普通の NP と同じような特性を示すのに対し、接語代名詞は普通の NP とは異なる特有の現象をもたらす。

16) 接語主語代名詞が VP 指定部にないことは、アルジェリア・フランス語において、実質的主語に加えて接語主語代名詞が義務的に出現することからも理解できる。

i) Pierre *il* mange. (Robert 2007: 38)
Pierre he eat$_{Pres.3Sg}$
「ピエールは食べる」

17) Safir (1985) は、VP の指定部には Jaeggli (1980) が主張している PRO を否定し、代名詞的空範疇 EXE (pronominal empty category) があるとしている。この EXE と代名詞的空範疇 *pro* とは項 (argument) であるかどうかにおいて異なるものであると Safir (1985) では主張されている。

18) 倒置文が小節主要部の編入により派生するとしている den Dikken (1994) は、*seem* や一般動詞が小節主要部を編入できないという指摘をしている。

19) *mon meilleur ami* が *sembler* の AgrSP に直接繰り上がり、*être* における小節構造では AgrSP との一致が生じないため、*ce* の併合が行われないと考えられる。

<コーパス>

Lextutor French Corpus (https://www.lextutor.ca/conc/fr/)

CORIS Corpus, Università di Bologna. (http://corpora.dslo.unibo.it/TCORIS/)

<参考文献>

Abeillé, Anne (1988) "Verbes «à montée» et auxiliaires dans une grammaire d'arbres adjoints", *Revue des linguistes de l'université Paris X Nanterre* 39, 1-38.

Amary, Valérie (2019) "Copular Setences and Binding Theory: The Case of French and Principle C", *Corela* 17(1), 1-32.

Belletti, Adriana (2004) "Aspects of the Low IP Area", in Rizzi, Luigi (ed.) *The Structure of CP and IP*, Oxford University Press, 16-51.

Bowers, John (1993) "The Syntax of Predication," Linguistic Inquiry 24(4), 591-656.

Cardinaletti, Anna (2004) "Toward a Cartography of Subject Positions," in Rizzi, Luigi (ed.), *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 2*, Oxford University Press, 115-165.

Citko, Barbara (2008) "Small Clauses Reconsidered: Not So Small and Not All Alike," *Lingua* 118, 261-295.

Collins, Chris (2005) "A Smuggling Approach to the Passive in English", *Syntax* 8(2), 81-120.

den Dikken, Marcel (1994) "Predicate Inversion and Minimality," *Linguistics in the Netherlands 1994*, 1-12.

——— (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, The MIT Press.

Heycock, Caroline (1995) "The Internal Structure of Small Clauses: New Evidence from Inversion," *Proceedings North East Linguistic Society* 25, 223-238.

——— (2012) "Specification, Equation, and Agreement in Copular Sentences", *Canadian Journal of Linguistics* 57 (2), 209-240.

Huot, Hélène (1982) "Constructions infinitives du français: le subordonnant *de*", *L'information Grammaticale* 15, 40-45.

Jaeggli, Osvaldo (1980) "On Some Phonology Null Elements in Syntax", MIT Ph.D dissertation.

Jones, Michael Allan (1996) *Foundations of French Syntax*, Cambridge University Press.

Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, The MIT Press.

Menshing, Guido (2000) *Infinitive Constructions with Specified Subjects: A Syntactic Analysis of the Romance Languages*, Oxford University Press.

——— (2017) "Infinitival Clauses", in Dufter, Andreas & Elisabeth Stark (eds.) *Manual of Romance Morphosyntax and Syntax*, De Gruyter, 369-396.

Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*, Cambridge University Press.

Radford, Andrew (2004) *English Syntax: An Introduction*, Cambridge University Press.

Rizzi, Luigi (1994) "Early Null Subjects and Root Null Subjects", in Hoekstra, Teun & Bonnie D. Schwartz, *Language Acquisition Studies in Generative Grammar: Papers in Honor of Kenneth Wexler From the 1991 Glow Workshops*, John Benjamins Publishing Company. 151-176.

——— (2015) "Notes on Labeling and Subject Positions", in Domenico, Elisa di, Cornelia Hamann & Simona Matteini (eds.) *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adrian Belletti*, John Benjamins Publishing Company, 17-46.

Roberts, Ian (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A comparative History of English and French*, Kluwer Academic Publishers.

——— (2007) *Diachronic Syntax*, Oxford University Press.

Rooryck, Johan (1997) "On the Interaction between Raising and Focus in Sentential Complementation", *Studia Linguistica* 51(1), 1-49.

Roy, Isabelle & Ur Shlonsky (2019) "Aspects of the Syntax of *ce* in French Copular Sentences", in María, J. Arche, Antonio Fábregas, & Rafael Marín (eds.) *The Grammar of Copulas across Languages*, Oxford University Press, 153-169.

Safir, Kenneth J. (1985) *Syntactic Chains*, Cambridge University Press.

Shlonsky, Ur & Luigi Rizzi (2018) "Criterial Freezing in Small Clauses and the Cartography of Copular Constructions", in Hartmann, J., Jäger, M., Kehl, A., Konietzko, A. & Winkler, S, *Freezing: Theoretical Approaches and Empirical Domains*, De Gruyter Mouton, 29-65.

上野貴史 (2014)「小節構造における不定詞補部：再構造化構文における *di*-INF と *φ*-INF」,『言語文化学会論集』第 43 号.

——— (2015)「イタリア語非対格自動詞補文の使用分布と統語構造」,『広島大学大学院文学研究科論集』第 75 巻, 43-60.

——— (2018)「イタリア語非対格動詞における補文の通時的変遷：古イタリア語の小節構造」,『イタリア学会誌』第 68 号, 73-94.

——— (2019)「イタリア語繰り上げ動詞・非対格動詞における基底構造の通時的変化：小節構造分析における再述接語と虚辞代名詞」,『歴史言語学』第 8 号, 1-40.

——— (2020a)「名詞述語文の小節構造分析：英語・イタリア語・フランス語の場合」,『ニダバ』第 49 号, 11-20.

——— (2020b)「フランス語 *sembler* とイタリア語 *sembrare* における属詞構文：数量的分析から見る繋辞性・動詞性」,『広島大学文学部論集』第 80 巻, 45-64.